

美濃市不登校支援推進事業

「あんきに行ける学校プロジェクト」について

美濃市教育委員会 学校教育課

1 はじめに

令和6年10月、文部科学省から、令和5年度の不登校等についての調査結果が発表された。全国的に不登校がさらに増えたが、美濃市も例外ではない。この状況を改善するため、美濃市では、令和5年度から不登校対策事業「あんきに行ける学校プロジェクト」として教育医療連携、令和6年度から行っているスクールカウンセラー（以下SC）と教職員の連携強化に取り組んでいる。

2 不登校対策事業の取組

(1) 不登校の実態

令和5年度において、本市の児童生徒数は減少しているにも関わらず不登校児童生徒数は増加していた。また、令和4年度の出現率は、小学校の全国平均を上回っていた。

(2) 教育医療連携とこれまでの取組

この状況を改善するには、まず、不登校で苦しむ児童生徒や保護者の安心感を高めることが重要であり、そのためには専門的な知見のある方からの見立ては欠かせないと考えた。そこで、本市では、令和5年度から、学校・保護者を対象とした医師による研修会や相談活動を行ってきた。また、不登校の起きにくい学校にしていくためには、学校が全ての子どもにとって安心できる場所であることが必要であるが、当事者である教職員からは「何が学校生活の息苦しさ」につながっているのかは見えにくい。そのため、数多くの不登校児童生徒の事例に関わっている医師の視点から不登校児童生徒への支援や学校運営へのアドバイスをいただくことで改善点を明らかにし、教育活動の改善を図ってきた。

(3) SCの有効性

市内にある7小中学校に対し2名のSCが、のべ年55日、県教委より派遣されており、拠点校（中学校2校）において月1回程度の相談業務を行っていた。SCに対する現場のニーズは高く、これまでも、その連携の在り方について試行錯誤を繰り返してきた。そこで、これまで行ってきた学校と医療との連携だけでなく、SCも医療と連携できるようにすることで、SCが、その中で得た知見を具体的な相談業務や学校運営へのアドバイスにどう生かすことができるのか、その有効性を検証したいと考えた。また、教職員、医師、SC、養護教諭、相談員、特別支援員等との相互連携を強める組織、連携の在り方を工夫し、全ての関係者による「チーム学校」としての支援の在り方を追究したいと考えた。

(4) 事業の内容

①事業概要

- ・岐阜大学大学院医学系研究科小児科 加藤善一郎教授を、市不登校支援アドバイザーに委嘱。
- ・SCを各中学校区に追加派遣する。
- ・これまでの学校職員と医師による教育医療連携の枠組みにSCも位置づける。

②事業内容

I SC派遣事業（相談業務の拡充）

- ・A中学校区（4校）に年36日、B中学校区（3校）に年19日、県教委より派遣。
→A中学校区に16日追加派遣し、年間50日程度の相談業務を行う。
B中学校区に34日追加派遣し、年間50日程度の相談業務を行う。

II 研修事業

【保護者対象】

- ・医師作成の不登校に関わる動画を、市内全保護者が視聴する機会を設ける。

【教職員対象】

- a : 不登校児童生徒への支援及び不登校の未然防止のための研修会。
- b : 各校教育相談担当及びSC対象の研修会（中学校区ごと）。
- c : 市内の幼保小中高の生徒指導主事対象の研修会。

Ⅲ 相談事業（医師との相談）

【保護者対象】

- ・一般的に不登校に対し、「病院に行って医師に相談する」という発想は理解されにくい。また、保護者や子どもにとって、病院に行くことは診察を受けることとなってハードルが高い。しかし、敷居の低い学校なら相談するために出向きやすい。そのため、学校で医師と面談できるようにすることで、気楽に相談できる環境を整備した。
- ・市内2中学校において、合計11日の相談日を設定。
- ・1日に4名までの保護者相談が可能。

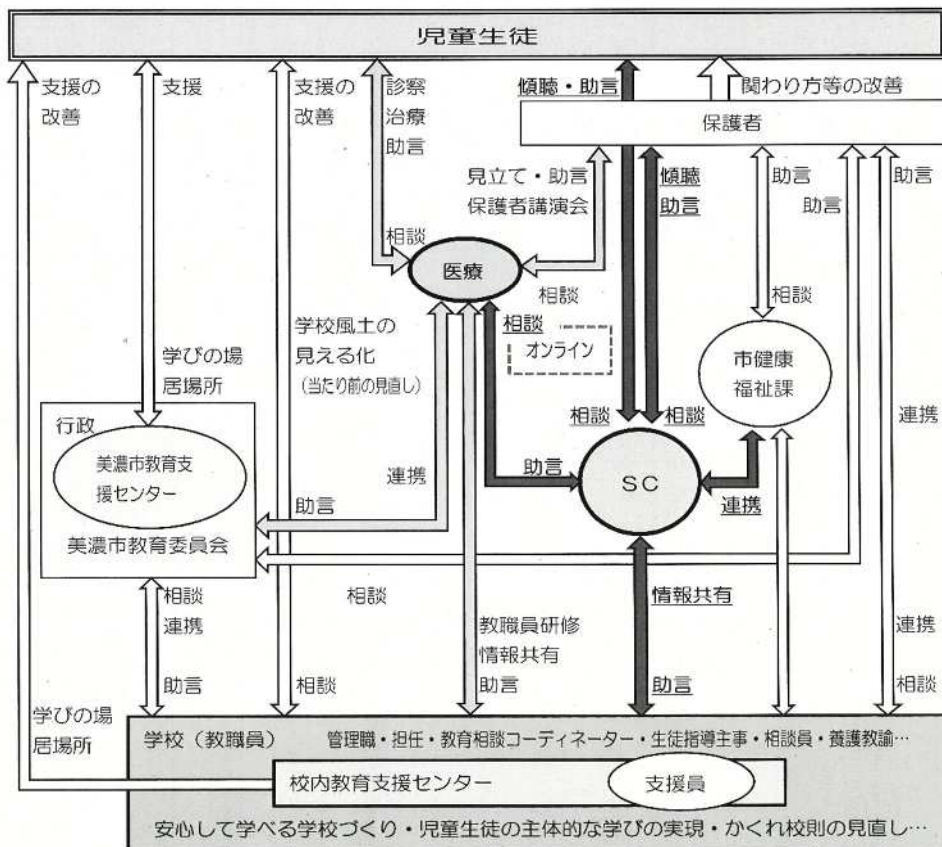
【教職員及びSC対象】

- ・医師と教職員及びSCが、オンラインにより情報共有・事例検討（対応の相談）ができる体制の整備。
 - a : 医師+市内全教職員+SC+市教委（医師による情報提供、啓発等）
 - b : 医師+各校全職員+SC+市教委（アセスメントシートを活用した個別の事例相談）
 - c : 医師+SC

Ⅳ 市民向け講演会

- ・基本的な不登校の状況や捉え方。
- ・令和5年度事業の成果と課題、令和6年度の不登校対策事業について。
- ・教職員も参加可能（SCには案内状を送付）。

③事業の全体像



3 おわりに

今年度、美濃市における不登校児童生徒において、改善傾向がみられる事例が増加しており、今のところ不登校児童生徒数は減少傾向にある。これらの事業を推進していくとともに、すべての子どもが主体的に学ぶ授業づくりや全ての子どもにとって楽しい学校づくりを通して、今後も不登校の生まれにくい学校を目指して日々努力していきたいと考えている。